

SHEKA MUNONGA!

青年海外協力隊・村落開発普及員 佐々木 梢の活動レポート

2012年10月17日発行

主な出来事

8月29～30日

中間報告会へ参加 in カンパラ

1年目を終えた先輩達の活動ぶりにとっても刺激を受けました。同期隊員と1ヶ月ぶりの再会（^^）/

9月19日

国際企業の日イベント会場視察

お隣リシェマ県で開催。カウンターパート（相談役/同僚）と視察。

9月21日

OVOP情報共有会合 in カンパラ

ウガンダ一村一品運動推進活動の関係者を集めた情報共有会合へ参加。

10月5日

ブシェニ養蜂家訪問

ラングストロス機材活用のための提案書作成のため、管轄地域内の養蜂家グループ4つを現地調査。

9月～10月

県庁職員の月例OVOP会議

県庁内担当者を集め、一村一品運動推進方法を話しあう会議。それぞれの部署が持つ情報を共有し、今後の協力体制を協議しました。



チーム OVOPブシェニ

BUSHENYI, REPUBLIC OF UGANDA

配属され早3ヶ月。頼りがいのあるメンバーと共に力を合わせ、日本発「一村一品運動」をヒントにしながら、この地域を盛り上げると～！えいえいおー（^^）人（^^）

んだども「一村一品運動」って何なのよ？

日本の大部分で始まり、今やアジアやアフリカでも広まりつつある、地域おこしの理論・手法。

それが『一村一品運動』です。

『一村一品運動』の三大原則

- ①「ローカルにしてグローバル」
地域性を持ちながら、全国・世界に通じるモノ・文化を創る事。
- ②「自主自立・創意工夫」
住民が主体になり、選び、育て、作り上げ、磨きをかけること。
- ③「人づくり」
国際的視野と挑戦する精神を持つリーダーを育成することが大事。

「一つの村に一つの品って単品に限れるわけ無えべ？」って？！

まあんずしてっこ待ってけれ。

一村一品運動の極意は、

『その地域オンリーワンを見つけて育てること』

一村一品は、その英語訳の

『One Village One Product』

の頭文字をとり、OVOPとも呼ばれてらんしょ。

地域の主人公『ヒト』が元気になる、この地域らしさを引き出す活動が出来たらいいなあ♡



ブシェニ地域の一村一品グループをご紹介します(^^)



**ブシェニ農業養蜂
家共同協会**
**Bushenyi
Farmers and
Beekeepers
Cooperative
Society Ltd.**

ブシェニOVOPでは一番大きな養蜂グループ。会員の蜂蜜を販売したり、蜜蝋の口ウソクにも挑戦中。写真は第1フェーズ評価ワークショップで、中央省庁の貿易産業大臣の前で発表するフランシス会長。次の頁で彼らの抱える課題を紹介します。



チアンガ 米生産家協同組合

**Kiyanga Rice Growers Cooperative
Society Ltd.**

旧ブシェニ県チアンガ地域のネリカ米グループ。JICAから貸与されている精米機やエンジンなどの機材に四苦八苦しながらも、研修に参加するなど積極的に活動中。写真は、私の前任者の岡本さんの話を熱心に聞くメンバー。



カティマ・スワジ グループ
Katima-Swazi Group

養蜂を中心に、家畜飼育（山羊、豚、鶏）、苺の栽培などに取り組んでいます。特に私が注目したいのは、グラディスさん（写真）ブシェニのOVOPグループで数少ない女性の活動家です。積極的にキノコ栽培に挑戦中。

**ムヒト
パイナップル
グロワーズ**
**Muhito Pineapple
Growers**



チタガタ地域のパイナップル農家グループ。乾燥パインやジャムに挑戦しながら、更なる加工方法を模索中。中心はリチャードさん。とても謙虚で熱心な方で、新しい取り組みに積極的な姿勢がとても素敵です。

【ブシェニ県庁からご挨拶】

ブシェニ地域は、波打つ丘が特徴的な標高1500-2000mの高山地帯です。年中安定した気温（12.5〜30度）と二度の雨期（9〜12月、3〜4月）のため土が肥沃で農業が非常に盛んです。

安定した熱帯気候のため、バナナ、茶などを一年中収穫することが出来、それらが住民の大切な収入源になっています。

日本の皆さんは熱帯地域は季節感がなく『旬の食材』が無いと思うかもしれませんが。でも私達にも季節の食材はありますよ。殆どの作物は雨期に種を撒き、乾期の始めに収穫されて食卓に並ぶのです。ヒエや豆がその例です。



ムフムザ・フランシスさん
ブシェニ県庁生産局 生産課長

遠くから想うふるさと

秋田を考える

外部との交流も大切

『若いものには旅をさせよ』

昔からこの地域（旧アンコレ王国）では、若者が外で積極的に経験を積もうとすることを奨励してきたそうです。そのため、今でも、海外留学（主に英国）や外部地域との交流事業に積極的な姿勢が見られるそう。JICAボランティアの受け入れもその一つではないでしょうか。

そのように送り出された若者はいつか故郷のために貢献すると期待されていて、ウガンダ西部からは沢山の法律家、ビジネスマン、政治家などが生まれています。特に有名なのは、ムセベニ大統領！

そのような住民の努力や成功が「西部の人は教育熱心で商売上手」というイメージに繋がっているとか。一村一品運動の理念「ローカルにしてグローバル」にも通じる！

秋田でも国際交流の盛んに取り組む様子を目にします！もしかしたら、秋田を元気にするヒントはそこサ隠れでらのがも〜(^^)ノ*

※おまけ※

秋田県人会へ参加

意外に多い?! 秋田県人

なんと、アフリカで初めて県人会に参加！秋田の酒ッコやきりたんぼ鍋でご囲んで熱く語って来ました。



『機材はあれども、肝心な巣箱は無し？』 眠った機材を稼働させよ～県庁が動き出した！

養蜂はブシェニ県の主要産業。
『ブシェニ農業養蜂家共同組合』もそれを支える団体です。

高品質で無駄が少ない「ラングストロス巣箱」を導入したいという計画が認められ、ウガンダの一村一品運動キックスタートグループとして選定、JICAから遠心分離機などが貸与されました。

・・・んだども、それから二年が経過。実は機材は未稼働状態。実はその原因は、自己負担で用意するはずだった専用巣箱が高価なため入手出来ていない事。このままでは折角のビジネスチャンスがモッタイナイ！県庁の責任問題にもなりかねない！アヤ～シカダネ

という事で、県庁職員が動きだしました。私も昆虫課長と提案書を作成中。先日、現地調査をして来ました。

提案書の内容は次号でお伝え出来る・・・ハズ？！



【写真】（中央）昆虫課長ムジュリジさんと養蜂家ムトシャさん、（左上から時計回り）建設中の蜂蜜採集センター、ブシェニ農業養蜂家協同組合の事務所、カティマスワジグループのKTB型巣箱、ムトシャさんのKTB型巣箱、伝統的な巣箱、周辺のコーヒーのつぼみ。ブシェニ産はちみつは多様な熱帯森林の結晶だんしな～



『カトーゴ』は調理法を指す言葉。基本的にはマトーケ（調理用バナナ）や芋を他の野菜と『混ぜて』煮込んだ家庭料理。だから材料も作り方も人それぞれ。朝ご飯によく食べられるのよ。味の決め手はジーね。

ナタリーさん
ご近所のオランダ人お母さん

ウガ飯のすすめ？ブシェニのマンマ*

KATOOGO カトーゴ

芋、調理用バナナ、

トマト、タマネギ、人参、ピーマンなどの野菜

ジー（バターに似た物）

固形ブイヨン、コンソメ

塩こしょう、好みのスパイス

野菜を薄めに切り、大きめに切った芋類と全て豪快に鍋に入れ、グツグツ。火が通って来たら調味料を入れてまたシテッコ煮ます。



出来上がりはあっさりしたトマト味の肉なし肉じゃが！とてもコクがあってウミヤ～

*マンマ（秋田弁：ご飯）

あきたのみなさん、まめでらんしか？
ウガンダ赴任からもう3ヶ月・・・いや、まだ3ヶ月？！
今の時期、こちらは雨期の真只中～！
普段はノンビリ歩く村人が突然早足になったと思うと、
空が暗くなり、ゴロゴロ、ピカー、ドドドーン！
下手な天気予報より、よっぽど当てる！
だども、雨の量は想像した程ではなくて、
乾燥した大地が、良い塩梅で水を吸い上げる感じ
やっぱり「雨」は「天からの恵み」なんだしな～

ところで、第1号の感想、ありがとさんでした^^
『ネリカミの坪井専門家の言葉が心に響いた』
『現地語ニャンコレ語が面白い』
『気候の違いが住民の気質にどう影響あるか知りたい』等
「そういえば？」と考えるヒントを頂きました。

これからも配属先の活動や日常生活の気づきを発信したい
と思います。ちょこっとずつ、ウガンダと秋田の人達の交流
の場さして行けたらいいなあと企んでいます。

せばまた！オバトゥラムチゼ（皆さよろしくね）



佐々木 梢（ささき こずえ）

JICA青年海外協力隊
平成24年度1次隊／村落開発普及員
ウガンダ国／ブシェニ県庁配属
一村一品運動推進活動
E-メール：sasakikozue@gmail.com
ツイッター：@euzokagain

SHEKA MUNONGA!

佐々木梢の活動レポート

KOZUE SASAKI
c/o JICA Uganda Office,
P.O. Box 12162, Kampala,